黄色いニワトリ
赤いニワトリ

高野敦志童話集



目次

黄色いニワトリ　赤いニワトリ

　まだ幼よう稚ち園えんに通かよっていたころ、おとうさんがダンボールの箱はこをかかえて帰ってきた。箱の穴あなからは黄色いくちばしがのぞき、ピヨピヨいう声までが聞こえてくる。目を輝かがやかせて開けると、親鳥ほどに育った二に羽わのオンドリが飛び出した。うれしそうにはばたくと、ぼくの周まわりをくるくる回りはじめた。

　おとうさんの友だちが縁えん日にちで買ったひよこで、狭せまい部へ屋やでは飼かえなくなったから、うちにもらわれてきたという話だった。子どもの目を喜よろこばせようと、ひよこの羽はねは黄色と赤に染そめられていた。生えたばかりの白い羽に混まじって、元の鮮あざやかな色もまだ残っていた。

　新あらたに家か族ぞくになった二羽のために、おとうさんは新しい木の匂においがする板を買って、ニワトリ小屋を作ってくれることになった。幼おさないぼくはノコギリが使えなかったから、おとうさんが挽ひいている間は、板の端はしをじっと押さえていた。赤ちゃんだった妹いもうとをあやしながら、おかあさんは目を細めながらぼくの方を見ていた。

　トタンの屋や根ねを取りつけ、正しよう面めんには金かな網あみを張はって、エサ箱も外から飼し料りようを入れられるようにした。お百ひやく姓しようさんの庭にわで見たニワトリ小屋に負けないくらい、立りつ派ぱな小こ屋やに違いなかった。ちょうどぼくの背が入る高さだったので、自分のうちを作ってもらったみたいで、ぼくは大はしゃぎだった。

「わーい、わーい」

　ダンボールに閉じ込められていたニワトリも、広い小屋で動けるようになり、歩き回ってははばたきをし、夜明けでもないのにコケコッコーと鳴くのだった。

　おかあさんにワラ半紙を買ってきてもらい、ぼくはクレヨンでニ

ワトリの絵を描えがいた。二羽が生まれてからうちにもらわれてくるまでの物もの語がたりや、ニワトリ兄きよう弟だいの歌などを作っては、まだ言こと葉ばの分からない妹に、得とく意いになって聞かせたりしていた。

　ニワトリ小屋は北きた側がわの日ひ陰かげにあったので、昼ひる間まは日当たりのいい庭に放してやった。そこには大きな桃ももの木があって、春には近所の人たちの目を引くほど、柔やわらかな色のピンクの花を、青空にくっきり浮かび上がらせた。二羽のニワトリは、桃の木の根ね元もとで、エサを探さがすために地じ面めんをつついている。おとなしく並ならんでいることもあったが、たまたま一羽が地面からはい出してきたミミズを見つけると、黒目の部分を小さくして、引っ張り合いを始めるのだった。

「ねえ、もっと仲なか良よくしなきゃだめだよ」

　ぼくは毎日、昼過ぎに幼稚園から戻もどるのが待ち切れなかった。若い女の先生や他の園えん児じたちと歩きながら、心は一ひと足あし先さきにうちに駆かけ戻ってしまっていた。やっと小さな門の前にたどり着くと、大きな声を張り上げて、鍵かぎを開けて中に入れてもらった。

　思っていた通り、ニワトリは庭で雑ざつ草そうをついばんでいた。ブランコの上に、肩かたから掛かけていたカバンを投げ出すと、もう追いかけっこを始めるのだった。

　そのころ、南みなみ側がわの境さかいには排はい水すい溝こうがあって、水をいっぱいに張って金きん魚ぎよを放していた。ぼくが背はい後ごから近づくと、だいだい色の小さな魚たちは争あらそうように、黒い影かげから逃のがれようと泳ぐので、かわいそうな数すう匹ひきが疲つかれて動けなくなるまで、何なん往おう復ふくでも追いかけ回したりした。

　金魚たちをいじめている気はしなかった。犬と駆かけっこしているくらいにしか考えなかった。おとうさんはあごに指ゆび先さきを当ててほほ笑えんでいた。ぼくがポーズを取る前に、スナップショットに収めてしまうのだった。その様子を、黄色いニワトリはじっと眺ながめていたらしい。

ある日、ぼくが幼稚園から戻ってくると、黄色いニワトリが飛び出してきた。赤いニワトリは無む関かん心しんらしく、庭にわ木きの根元をほじくり返しては、出てきたミミズと格かく闘とうしている……。

「おい、ぼくをお迎むかえに来てくれたのかい？」

そう呼びかけて通り過ぎたとき、ぼくはふくらはぎに鋭するどい痛みを覚おぼえて飛び上がった。どうやら黄色いニワトリは、ぼくをよそ者と思って番ばん犬けんの役やくを買って出たか、いじめられた金魚を見て義ぎ憤ふんにかられたらしいのだ。

「やめろよ。ぼくはおまえのご主しゆ人じんさまだぞ」

逃げ回るぼくを見たニワトリの方は、いじめの面白さを知ったらしく、それからは小さな門の前にぼくが立つと、待ってましたとばかりに、羽をばたつかせて寄ってきては、黄色くとがったくちばしで、ももといいふくらはぎといい、いやというほどつつき回すのだった。ぼくはいじめられる側のつらさ、というものをはじめて知った。と同時に、いじめられるままになるのは、相手の思うつぼにはまるだけだ、ということにも気づかされた。そこで、逃げ回りながらも、口だけは強がりを言ってのけた。

「おまえ、そんなにぼくをつついていると、しまいには焼き鳥にして食べちゃうからな」

ニワトリに人の言葉が通じるかどうか、ぼくは知らない。ただし、それを口にした時のこちらの怒いかりは、はっきり伝つたわっていた気がする。ぼくは黄色いニワトリと仲なか直なおりすることなど考えず、いきなり殺ころしてしまおうと思ったのだから。単なる脅おどしに過ぎなかったのだけれど、十じゆう分ぶん過ぎる効こう果かをニワトリに与えることになった。

明あくる日からだった、ぼくが幼稚園から戻ってきても、出で迎むかえてくれる鳥の姿すがたがなくなったのは。黄色いニワトリは日に日に気き弱よわとなって、つつこうとしないばかりか、こちらの姿を見かけると、逃げ回るというありさまだった。ぼくは仕返しをしてやるつもりで、面白がって追い回し続けた。棒ぼうなど使って小こ突づきこそしなかったが、ぼくが足に受けた痛みの数すう倍

ばいは、苦しめてやろうと思ったのだ。
　はたで見ていた赤いニワトリまでが、いじめの面白さに取りつかれてしまった。多た少しようかわいそうになって、ぼくが追い回すのをやめてからも、赤いニワトリは黄色い兄弟をくちばしでしつこく攻せめ立てた。オス同どう士しのなわばり争あらそいのようだった。狙ねらわれたのは、一番の急きゅう所しよであるお尻しりだった。羽や固い骨ほねに守られることなく、肉がむき出しになっている部分で、ちょっとつつかれるだけで、鮮せん血けつが吹ふき出してくるのだ。血のしぶきを目にすると、赤いニワトリの神経はますます高ぶっていった。
―黄色いくせに、おまえの体にも赤い血が流れていたんだな。
　そうあざ笑わらうかのように、赤いニワトリは治なおりかけた兄弟の傷きずを、さらにつつき回すのだった。しまいには見ていられなくなり、いじめが始まるとやめさせていたが、ぼくが目を離はなしたすきに、また追いかけ始めてしまうのだった。
　気がついて外に駆け出すと、黄色いニワトリは血まみれのまま、庭の芝し生ばふの上に横たわっていた。まだ生きてはいたけれど、荒あらい息いきをするように胸むねを大きく膨ふくらませ、小さくつぶらな目は、黒い瞳ひとみがゴマ粒つぶみたいに止まっていた。赤いニワトリはまだやり足りないのか、黄色い羽をくちばしで引き抜こうとしている。
　ぼくの叫さけびを聞いたのだろう。おとうさんが物もの置おきから棍こん棒ぼうを取り出して、血を浴びてますます赤くなったニワトリを、そばから追い払ってくれた。荒かった息は急に弱まって、一・二度大きく息をすると、ぴくりとも動かなくなってしまった。
　おかあさんがぼろ布で傷きず口ぐちをふいてくれたので、ぼくはまだ温あたたかみのある死んだ体を抱だき上げた。魂たましいの抜けていった分、ニワトリは軽くなったような気がした。涙なみだが込み上げてくると、あたりかまわず大声で泣き出した。黄色いニワトリが生きる勇ゆう気きを失うしなって、これほどあっけなく死んでいったのも、すべて自分のせいであったように感じて。
　冷たくなったニワトリの体は、その日の暮くれる前に、いつも二

羽が遊あそんでいた桃の木の下に埋うめられた。それから赤いニワトリはどうなったか、だって？　あいつのことは目にするのもいやだ、とぼくが言い張ったせいで、近所の米こめ屋やにもらわれていった。それについて詳くわしいことは、おとうさんもおかあさんも教えてくれなかった。おそらく、連れて行かれた日のうちに首くびを絞しめられ、晩ばんのおかずにされてしまったことだろう。

子どもの作り方

「もうすぐおにいちゃんになるのよ」
　ある日突とつ然ぜん、三つだったぼくはおかあさんに言われた。そんなこと聞かされてもピンとこない。兄きよう弟だいのうちの上がおにいちゃんだ、ってことぐらいは知っていたけど。
　おかあさんの体の中で何かが始まっていた。やせて小こ柄がらだったおかあさんは、日に日にお腹なかばかりふくらんでいった。どうして子どもは生まれるんだろう。それが一番知りたいことだった。
　ぼくはそのしくみを、自分なりにいろいろ考えてみた。結けつ婚こんしたというだけで、女の人の体に変へん化かが出て、赤ちゃんが出来てしまうんだろうか？
　それじゃあ、生まれるときは、どこから出てくるんだろう。おかあさんのへその下にはおちんちんが付いていない。たてに長い切れ目があるから、もしかしたらそこからかもしれないが、そんな小さな穴あなから赤ちゃんが生まれるとは、どうしても信じられなかった。ぱかんとお腹が二つに割われて、桃もも太た郎ろうみたいに元気な赤ちゃんが飛とび出すんだろうか？
　こうした謎なぞをおとうさんにきいてみると、おちんちんを女の人の穴に突つっ込むんだと教おしえてくれた。
「へえ、ぼくのも入るのかな」
　一人になったぼくは、社会の窓から引っ張り出すと、ブラブラ下がった親おや指ゆび小こ僧ぞうを見た。きっとおとうさんは、ぼくをからかっているんだ。ぼくの小さくてやわらかいやつが、どうやったら女の人の体に入っていくんだろう。謎はますます深まるばかりだった。
　それから数日たって、おかあさんは実じつ家かのそばにある大だい学がく病びよう院いんへ、入にゆう院いん前まえの検けん査さを受けに行った。おかあさんが呼ばれて行くと、ぼくは廊ろう下かの

長なが椅い子すにぽつんと残された。
　うなだれてるのをかわいそうだと思ってくれたのか、看かん護ご婦ふさんが赤と紺こんの二色の鉛えん筆ぴつとわら半紙を渡わたしてくれた。
　そのころのぼくは白はく衣いを着た女の人のことを、「かんごくさん」と呼んでいたっけ。それから、カレーライスと一いつ緒しよに食べる赤い福ふく神じん漬づけのことを、「女の子のおしんこ」と呼んでいた。ぼくは「おちんこ」なんて言った覚おぼえないのに、「女にちんこなんか付いてないだろ！」っておとうさんに笑われたりした。
　その日、鉛筆と紙を渡されたぼくは、すぐに飽あきてしまって、おかあさんの姿すがたを求めたんだけど、どこにいるのか全ぜん然ぜん分からない。ぼくは泣き声を上げて、おかあさんのことを呼んだ。自分がまだ赤ちゃんであるみたいに……。

　病院の外に出ると、日ひ傘がさをさした着き物もの姿すがたのおばあさんが待っていた。白い髪かみを結ゆい上げて、天てつ辺ぺんをべっこう飴あめの色したくしで留とめている。しわの刻きざまれた額ひたいの下には、静かにものを見る目があった。孫まごのぼくが近づいていっても、ニコニコ笑ったりしなかった。おばあさんはずっとむかしの「明めい治じ」という時じ代だいに生まれた人だった。このちょっとこわそうなおばあさんこそ、ぼくのおとうさんのおかあさんだった。
「あなた、これからおにいちゃんになるんでしょ！」
　まだ目をこすっていたぼくは、何でしかられているのか分からなかった。その時おかあさんは、おばあちゃんがぼくのうちに来ることになっていると言った。赤ちゃんを産むために、おかあさんはしばらく家からいなくなるからだった。
　ぼくは不ふ思し議ぎそうな目で、おばあさんの顔を見上げた。ぼくは八人目の孫だったから、子こ猫ねこみたいにかわいがらないんだろう。
　おかあさんが入にゅう院いんしてしまうと、おばあさんがぼくの

うちにやって来て、ご飯はんを作ったり洗せん濯たくをしたりしてくれた。片かた付づけをしてしまうと、おばあさんはお膳ぜんの前に座すわって、わけの分からないむかしの本を読み出した。何の話なのってきいたら、ヒカルゲンジのお話しよって教えてくれた。
きっとホタルか何かが出てくる話なんだなとぼくは思った。
　おとうさんは中ちゆう学がつ校こうで教えていたから、まだ幼よう稚ち園えんに上がっていなかったぼくは、おばあさんと二人きりになった。むずかしそうな本を読んでいる間、声をかけると怒られそうな気がした。おとなしくおすわりすると、おばあさんの顔と本のページを見み比くらべていた。そこにはひらがなにまじって、わけの分からない黒いしみが、秘ひ密みつの絵みたいにならんでいた。おばあさんはなぞなぞでもしながら、たから探しをしているんだろう。
　ぼくはすぐに飽きてしまって、おとうさんの部屋の中を歩き回った。本を読んでいたおばあさんは、落ち着かなくてしょうがないといったようすで、「どうしたの」と自分の方からたずねた。
「あれって何て書いてあるの？」
　おばあさんはニコリと笑った。何か良いことしたのかな。ぼくはうれしくなって、次つぎ々つぎに質しつ問もんをしていった。
「それは宇う治じ拾しゆう遺い物もの語がたり」
「うじちゅういものがたり？　あれは？」
「更級さらしな日につ記きよ」
「ちゃらちなにっき？」
　ぼくは話をするのが苦にが手てだった。何かしゃべると、近きん所じよの子どもたちはゲラゲラ笑って、ぼくにアカンベエをするのだから。
「赤ちゃん語しゃべってらあ」
　ぼくもおかしくなって一緒に笑った。病気じゃないか、とおかあさんは心しん配ぱいして、お医い者しやさんに診みせに行ったほどだった。そんなぼくだったから、おばあさんもうれしかったんだろう。
　休みの日が来ると、ぼくのことを聞いたおとうさんに、「あの本

は何だ」とよくきかれた。
「うじちゅういものがたり、あれはちゃらちなにっき」
　ひらがなを覚おぼえるよりも前に、漢かん字じが読めるようになったことを、おとうさんも喜よろこんでくれたらしい。でもぼくは、漢字が文も字じであることを知らなかったし、絵をならべたなぞなぞにしか見えなかったんだから。
　そのころ、ぼくのうちでは、やかんで沸わかした麦むぎ茶ちやを洗せん濯たく機きのすすぎ水で冷やしていた。ようやくさめたところで、お父さんが空あけたウイスキーのビンに注そそぎ込こんでいく。
　その日もおばあさんは、家の仕事を終わらせると、休みでいたお父さんの部屋に行き、次に読みたい本を探していた。そのすきにぼくは台所に駆かけ込んだ。前から謎に思っていたことを、実じつ験けんで確たしかめようと思ったからだ。
　ビンに詰つめられた麦茶は、ニンジンやゴボウ、大だい根こんなどとともに、注ぎ口を手前にして金かねの栓せんがされていた。冷たい空気が半ズボンに当たると、ももの周まわりが鶏とり肉にくの皮みたいに変わっていく。迷まよっているうちに、ビンはうっすらと汗をかき出した。ぼくはその口の方に手を伸ばした。
　台所で何かやっていることに、おばあさんが気づかないはずもなかった。ただ、ぼくの方が少し早かった。予よ想そうした通りのことが起こったのだ。栓を外されたビンの口からは、ドクドクと麦茶が流れ出し、床に茶色い地ち図ずを描いていった。得意になっておとうさんに知らせようとしたとき……
「何だい、この子は！」
　思わず顔を上げたぼくは、今まで目にしたことのない、怒りに震ふるえているおばあさんを見た。その場にぼくがいることさえ認みとめたくない、といった冷たさがあった。
　しゃがんで床をふくおばあさんを尻しり目めに、おとうさんの部屋に逃げ込むしかなかった。寝ね転ころんで本を読んでいたおとうさんは、大体のことが分かったんだろう。ぼくが起こったことを全ぜん部ぶ話すと、おとうさんはしばらく考えていた。やがて思いつ

いたみたいに顔を上げて言った。
「おばあちゃんに謝あやまっておいで」

　ぼくに妹ができた、ということを知ったのは、それから十日ほど過ぎてからだった。病院に見み舞まいに行く朝、おばあさんにシャツのボタンをかけてもらうと、出かけるのが待ち遠しくて、畳たたみの上で跳はね回っていた。
　玄げん関かんでおばあさんは幸せそうな目で、ぼくとおとうさんを見送った。階かい段だんを駆け下りると、おとうさんが後うしろにいるのを確かめながら、道どう路ろの上で丸くスキップした。お日さままでが、妹が生まれたことを祝いわってくれてるみたいで。
　病室の中でおかあさんはベットに寝たきりだった。妹が逆さかさまに入っていたので、おかあさんのお腹はメスで切られて、糸で縫ぬい合わされたばかりだった。おとうさんが教えてくれた穴からは、妹は出てこなかったというわけだ。
　ぼくが駆け込んでいくと、おかあさんはゆっくり体を起こし、こちらに手を差し出してくれた。
「あの中に、いただいたカステラがあるわ」
　ベットの脇わきの引き出しを開けたとたん、箱の中の黄色い菓か子しから、カラメルの甘あまいにおいがしてきた。おとうさんに切ってもらったカステラを、床にポロポロこぼしながら、口いっぱいに食べていると、おまえはまったくリスだな、とおとうさんがにやにや笑っている。甘えたくなってベットの端に座ったけれど、ばねが跳ね返るのがおもしろくて、おかあさんの傷が痛むことなど忘れて、トランポリンみたいにジャンプした。
「あらあら」
　おかあさんの体たい温おんを計はかりにきた看かん護ご婦ふさんは、それを注意しようとして、吹き出してしまったらしい。妹の顔が見たいと言うと、子どもはそこには入れないのよ、という答え。でも入口からだったら見せて上げるわ。看護婦さんに連れられて、のぞき窓のついたドアの前で、ぼくはだっこしてもらった。
「ほら、右から三さん番ばん目めの子よ」

　妹はまだガラスの箱の中に入れられていた。そんなこと言われてもピンと来ない。赤ちゃんはまわりのおサルさんたちと、大して変わらない顔をしていた。妹が生まれたのを知り、おかあさんのお腹を引き裂さいて出てきた、ということまで分かったが、どうすれば子どもが作れるかは、いくらおとうさんに説せつ明めいしてもらっても、中ちゆう学がく生せいになるまでずっと謎だった。

インコのピーちゃん

ぼくが高こう校こうに入って最さい初しよの冬のことだった。夜中まで降っていた雪ゆきがやんで、窓からは白く化け粧しようした木々の枝が、朝の光を浴びて輝かがやいていた。風はやんでいたけれど、寒さはきびしくなっていた。小さな平ひら屋やのうちの中では、ご飯を食べるキッチンだけストーブがたかれていた。ぼくが茶ちや碗わんを手にして、ご飯を食べていると、窓まど辺べに立っていた妹が声をあげた。
「ほら、こんなところにインコが……」
声に誘さそわれて目をやると、格こう子し窓まどのガラス越ごし、雪の吹きつけた枠わくの上に、まだ幼おさないセキセイインコが止まっていた。小こ鳥とりは寒さに震ふるえているのか、暖あたたかい室しつ内ないをじっと見つめている。生まれたときから人に飼かわれていたのが、たまたま開いた窓から逃げ出して、雪のせいで体が冷えきっていたのだろう。
「中に入りたがっているのかな」
恐る恐る窓を開けてやると、動かずにいたインコは、差し出された手の甲こうにちょこんと乗った。冷たい空気が吹き込み、あわてて窓を閉めたときには、インコはうちの家族になっていた。
目の下に白い羽の生えた鳥は、黄色い翼つばさが左さ右ゆうそろっていなかった。生まれつきそうなのか、事じ故このために骨が折れて、そのまま固まってしまったのか、それとも、遠くへ飛べないように、翼の一部を切り取られていたのだろう。
手から下りたインコは、えさでも探さがすみたいにテーブルの上をついばんでいる。パンを小さくむしってやると、のどを詰まらせそうにして食べる。お腹なかがいっぱいになると、幼い子どもの目で、わたしはいったいどうなるの、と問いかけてくる。
意い地じの悪い子に見つけられていたら、小石をぶつけられて死ぬか、首をしめられてしまっただろう。それほど人を恐おそれるこ

とを知らなかった。もしお腹をすかせて動けなかったら、カラスにくちばしで食いちぎられるか、ネコのおもちゃにされて、死ぬまで小突き回されていただろう。だから、ぼくの家に迎えられたことは幸せだったのか？

　インコを外に放してやる、という考えは浮かばなかった。それは飛ぶのが苦手なこの鳥を、死に追いやることになるからだ。のんびりくらす代わりに、おまえは大空を飛ぶ自由を捨ててしまったんだよ。

　ぼくはインコをピーちゃんと呼ぶことにした、家族の一いち員いんなのだから、できることなら部屋の中だけでも、飛べるようにしておきたかった。しかし、ぼくが学校に行っている間は、部屋を汚すからと許してもらえなかった。

　物置の中には以い前ぜん飼っていたカナリアの、青い小さな鳥とり籠かごがしまってあった。疑うことを知らないインコは、手の甲こうに乗ったまま捕とらえられ、籠の中に閉じ込められてしまった。何が起こったのか、まったく分からないといった様子だった。激しく羽をばたつかせ、針はり金がねの格子に飛びついたまま、きいきいと叫びを上げている。こんな仕打ちをされるようなことを、わたしがいつしたの？　とでも言うように。

　夕食を終えてから風呂に入るまでが、とらわれの身となった鳥の自由な時間だった。扉とびらを開けようと手をかけると、待ち切れなくなった鳥は、止まり木に逆さにぶら下がったまま、身を乗り出してこちらを見る。出口を開けたとたん、激しく翼をはばたかせて、じゅうたんの上で小躍こおどりを始める。

　五・六度あたりを跳はね回ると、一気にカーテンの上まで舞い上がり、誇ほこらしげにこちらを見み下おろしている。眠くなって舟をこいでいるうちに、落ちそうになったところで、ぼくの肩の上まで舞まい下りてきた。

　首を横に向けると、ピーちゃんは米こめ粒つぶよりも小さな目で見つめ返す。黒い点みたいなレンズの中に、ぼくの顔が収まってい

るなんて、ちょっと信じられなかった。こちらが唇くちびるを動かして見せると、インコもくちばしをもぐもぐさせる。本のページに目を移すと、さびしくなったのか、ちょこちょこ腕うでを伝つたって下りてくる。手首のあたりに止まったまま、字を追うぼくの目をまじまじと見つめる。

　何だかかわいそうになり、ピーちゃんの方に目を向けると、インコの表ひよう情じようは変わらないけれども、不ふ思し議ぎに落ち着いた様子で、飽あきることなくこちらを眺めている。まるでおばあさんが、幼い孫をいとおしむみたいに。

　本を片かた付づけたぼくは、今度は日につ記きをつけ始める。ペンを握にぎって書くことほど、インコの心をいらだたせることはなかった。書き進めている間は、体が揺ゆさぶられて落ち着かない上に、鳥を無む視ししているのは明らかだからだ。ペンを目の敵かたきにして、戦いを挑いどむピーちゃんは、鋭い叫びとともに、黒目の部分を点に縮ませ、ペン先にくちばしで激しい攻こう撃げきを加くわえる。ぼくが構かまわずペンを進めると、これでもかこれでもかと、気き絶ぜつしかねない勢いきおいでつつき続ける。たまりかねてペンを投げ出しても、インコの怒りはすぐには解とけず、小さなくちばしでペン先をつかみ、机の上でひきずり回してしまうほどだ。

　そこでちょっとしたいたずらを思いついた。インコを手の甲こうに乗せたまま、洗面所の鏡の前に近づけていった。目の前にもう一羽の鳥が現れたと思ったのか、頭の上の毛を鶏冠とさかみたいに逆さか立だたせ、おどそうとしてにらみつける。小こ癪しやくなことに、向こうのインコは真ま似ねをする。くちばしでつつくと、歯向かってくるではないか。抗こう議ぎで上げた自分の叫びでさえ、ピーちゃんには敵の怒りに聞こえているのだろう。相手がペンの時とは違って、一方的にこらしめるわけにもいかない。くちばしによる攻撃と、ぶつかった痛みによる悲ひ鳴めい、という繰り返しで、インコは気が変になりそうになる。ようやくぼくは、インコを鏡かがみの迷めい宮きゆうから解かい放ほうしてやることにした。

　寝ね床どこの支し度たくをする前に、ピーちゃんを籠に入れなけ

ればならない。畳のイグサをくちばしで引っ張っているところを、そっと後ろから忍しのび寄るのだが、インコも同じ手にはかからなくなる。影かげが迫せまるのを感じると、キーキー叫び声を上げて逃げ回る。鳥とり目めという言葉があるように、常じよう夜や灯とうだけにするともう飛べずに、絶ぜつ叫きようして掌てのひらの中で暴あばれるのだ。

　やがて、おとなしくつかまるのが楽だと分かったのだろう、明るいまま追い立てるだけで、自分から籠の中に入ってくれるようになった。ただし、昼間はずっと閉じ込められたままなので、一ひと月つきもたたないうちに、カナリアが住んでいたわらの巣は、見るも無む残ざんにむしられてしまった。

　それから数すうヶか月げつのうちに、インコはすっかりなついて、ぼくが鳥籠のそばに寄るだけで、バレリーナのおじぎみたいに、左右の翼つばさであいさつしてくれるようになった。母が話をしている時など、耳を傾けるような素振りを見せる。何か小こ言ごとを口にしていると、母の口く調ちようそっくりに真似て見せる。一つ一つの発音はあいまいだけれど、短い言葉ならはっきり言えるようになった。「おはよう」と声をかけると、すぐに「おはよう」と返ってくる。

「ピーちゃん」

「……？　ピーちゃん」

　インコは自分の名前を呼ばれているとも知らずに、ただ口真似しているだけなのだろう。まったくのおうむ返しというのはつまらない。ここでちょっと、悪い言葉でも覚えさせてやろうと思った。

「おい、おまえはバカか」

「アツシ！」

　これはまったくの偶ぐう然ぜんだったが、名前を口にされてぎょっとした。恐らくは母がぼくを呼ぶ声を耳にして、たまたま口にしてみただけだったろうが。

　心が通じるようになってくると、小鳥でも人の心を理解しようと

する。こちらがどうすれば喜ぶか、あの小さな頭で考え出しているらしい。
　人の肩に止まったピーちゃんに、赤ん坊をあやすみたいにすると、何度かはばたきをしてくれる。わざと驚いて見せると、調子に乗ったインコは、翼の勢いで飛ばされそうになりながら、爪を立てではばたき続けるのだ。人を喜ばすのがインコにとっても、やはりうれしくてならないのだろう。
　自然の中で鳥と鳥が、そこまで心を通かよわせ合っているだろうか。たぶんひなのころから人に接することで、人間の気持ちを知るだけの知ち恵えがついたのではないか。
　どうやらピーちゃんは、ぼくを仲間だと思っているらしく、テレビを見ている時などに、肩から腕に下りてきて、こちらの顔を見つめ、どうして二人一緒にいるのに、相手してくれないのか、といった表情をする。それでもぼくが画面を眺めていると、そんなに面白いなら、自分にとってもためになるはずだと、言葉も分からないくせに、腕に止まったまま、テレビに見入っているのである。それでも、音おん楽がく番ばん組ぐみは好きらしく、メロディーに合わせて、多少音おん程ていのはずれた独どく唱しようを聞かせてくれたりする。

　ぼくとピーちゃんの信しん頼らいは築きずかれたわけだが、しばらくして強力なライバルが現れた。生まれて一いと月つき足らずの子犬を、妹がもらってきてしまったのである。胸に抱かれていたのは、茶色い毛並みの柴しば犬いぬで、人間の赤ん坊と同じく、ちっちゃな体に丸く膨らんだ目と黒い鼻が大きく、母親から引き離されたのを知って、おびえるように縮こまっていた。
「へえ、かわいいもんだな」
　妹の腕の中をのぞき込んで、あどけない顔に見とれていると、居い間まで遊んでいたインコが、一体何事かと血けつ相そうを変えて、突っ込むみたいな勢いで、玄関前の廊ろう下かまで飛び出してきたのだ。恐らく動どう物ぶつの勘かんで何か重じゆう大だいなこ

とが起きたのを、知ったに違いなかった。今まで独り占めしていた皆の関心が、生まれたばかりの強きよう敵てきに奪われるのだと。
　確かにぼく以外には、ピーちゃんを構ってやらなくなり、旅行に出かけている間なども、籠の中に入れられたままだった。そのためだろう、インコは子犬に対して、ますます敵てき意いをあらわにするようになった。
　初めのうちダンボールの箱に寝かされていた犬は、父がリンゴ箱で作った小屋に移された。牛乳沸かしで柔らかく煮たおかゆを、冷さますために縁えん側がわのじゅうたんの上に置くと、カーテンからインコが飛んできて、鍋なべの柄えの部分をくちばしではさむと、体のどこにそんな力があるのか、と思えるほどの勢いで、ぐるぐる鍋を回してしまう。えさをやって空からになっている時など、腹はら癒いせにつつき回したあげく、中に入ったスプーンもろともひっくり返してしまうのだった。
　ある春の午後、ぼくが子犬の様子を見ようと、インコを放しているのも忘れて、うっかり窓を大きく開けた時だった。わずかなすきに、ピーちゃんはパッと軒のき先さきに飛んでいくと、小屋の中で居い眠ねむりしている子犬など見向きもせずに、つぼみが膨らみかけた桃の枝に移っていった。
　あわてるぼくをよそに、そちらの枝、あちらの枝と移りながら、長い間味わえなかった外の空気を、思うままに楽しんでいるようだった。もうあなたがたには愛あい想そを尽つかしましたよ、とでも言うように。
　インコは次し第だいに庭の端の方に移っていった。このまま通りの電でん線せんにまで行ってしまったら、我わが家やに戻ってくることはないだろう。ぼくはここ数ヶ月のピーちゃんに対する、冷ややかな態たい度どについて思った。心のつながりは切れかけている！　薄うすれかけたピーちゃんへの思いがよみがえり、遠ざかろうとする黄色い翼つばさに向かって祈いのった。ぼくのことを見捨てないでくれ、もう一度だけチャンスをくれ、と。インコは青空高く舞い上がったかと思うと、大きく弧こを描いてはばたきながら速度を落とし、ぼくの肩の上にちょこんと乗った。

ピーちゃんとぼくはまた仲良しになった。けれども、秋が過ぎて冬が訪おとずれるころには、また関心は薄れてしまったのだ。自分の心をとらえていたのは、大きく成せい長ちようした柴犬と一緒に、野山を駆かけ回ることだったからだ。
夕食を済すました後、申し訳程度に部屋で放すだけで、糞ふんをするから汚いという母の苦く情じようもあって、早そう々そうに籠の中に戻してしまうようになった。インコをはじめ熱ねつ帯たい原げん産さんの鳥は、とりわけ真ま冬ふゆの寒さには弱い。夜遅くなる前に、インコの籠には黒い布をかけていた。冬場は食べる量もふえる。朝にやったえさの箱が、晩には殻からだけになっている。粟あわを入れてやると、気が狂くるったみたいに、目の色を変えてのどを詰まらせるほどの勢いで、数分間は食べ続けていたりする。

ぼくの就しゆう職しよく活かつ動どうが始まっていた。インコを構ってやる余よ裕ゆうはなくなり、えさをやるのも母に任せっきり、何日も相手をしてやらないこともあった。ふとんを敷いていると、黒い布の下でガサガサ暴あばれていたが、それも大して気には留めなかった。
朝になって雨あま戸どを開けると、久し振りにインコの顔が見たくなって、黒い布をそっと外してみた。止まり木には鳥の姿はない。籠の底にインコは横たわり、えさ箱の中に頭を突っ込んでいた。粟の殻さえも食べ尽くして、じっと動かぬままだった。
「ピーちゃんが死んだ！」
思わず叫んで台所に走り込んだ。ぼくは自分の言葉が裏うら切ぎられ、死にかけたインコが命を取り留めるようにと、心が張り裂けそうになっていた。
恐る恐る籠の中に手を入れると、掌てのひらにインコを載せて取り出した。羽はすでに乾き切っており、体は驚くほど軽くなっている。生きていた時の信じられないほどの力は、何かと一緒に抜けていってしまったようだ。まだ体には温ぬくもりがあったので、生き

返らせようとして、電気ストーブで暖あたためたりしたが、足はぶらぶらと左右に揺ゆれるばかり。開けたままの瞳ひとみもやがて乾いて、首もだらりと垂たれ下がってしまった。

　ぼくはようやく、自分がピーちゃんにした仕打ちを思った。雪のやんだ朝、たまたまぼくの家を訪たずねて、心を開く機会を得て、自分を人間のように感じるようになったのに。心変わりをしたぼくは、あいつを籠に閉じ込めたままにしていた……。

　心の結びつきを知った鳥にとっては、人間に劣おとらない苦しみだったろう。素す直なおな気持ちしか抱いだかず、文句を言うこともできない分だけ……。いっそのこと、情なさけなどかけてもらえず、一生籠に閉じ込められたままの鳥の方が、期き待たいに身を焦こがさない分だけ、苦しみは少ないのではないか。

　ピーちゃんが死んでからは、ぼくはもう鳥を飼うことをやめた。子どもだった柴犬も、十年以上たって死んだ。今ではぼくの庭に見られるのは、スズメとヒヨドリ、ヤマバト、ノラ猫ぐらいなものだ。こいつはぼくのものだなどと、勝手な思いを抱いだくこともない。

　人間の心など知らない方が、自然のままに生きた方が、動物にとっては幸せだからだ。籠の中に閉じ込めたり、鎖くさりでつないでおくなんてもうこりごりだ。

　それからというもの、庭を花でいっぱいにすることにした。今はツツジが満まん開かいだし、少し前まではジンチョウゲが、つつましやかな香りで、穴の空あいた心を慰なぐさめてくれていた。鉢はち植うえのスミレやマツバボタンも、水を欠かさずやることで、つぼみを大きく膨ふくらませていく。夏の夜、ただ一夜だけ、みだらな白い花を咲かせるクジャクサボテンなどは、我わが家やが誇ほこれる幻まぼろしの花だろう。

　みずみずしい花々の姿を見ると、自分が生きているという感かん覚かくがよみがえってくる。けれども、ぼくの夢の中に出てくるのは、死んでしまった動物たちばかりで、インコはいまだに肩に止まって、老人の繰くり言ごとみたいに何かしゃべっているし、おととし死んだ柴犬だって、元気に走り寄ってきて、ぼくの頬ほおをペ

ろりとなめてくれる。それはぼくがまだ幸福だったころの思い出と、一つになっているからだろう。

あとがき

　ここで取り上げた三篇は、僕にとっては幼時から、成人したころまでの思い出が元になっている。童話集と銘打ったけれども、子どもに読ませるのに適しているかどうかは、はなはだ疑問である。ただし、小学生が読んでも分かるように、難しい表現は極力避けて、読みにくそうな漢字にはふりがなを多数つけた。

　二〇一三年一月十八日

髙野敦志